平成７年８月５日（土）

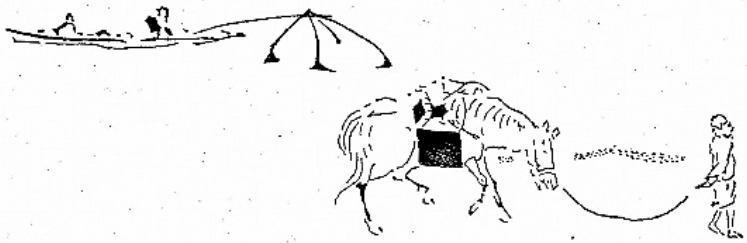
第２１回　越谷市民まつり

郷土研究会
展示出品紹介

（昭和２７年・桜井小学校）

『消えた木造校舎』

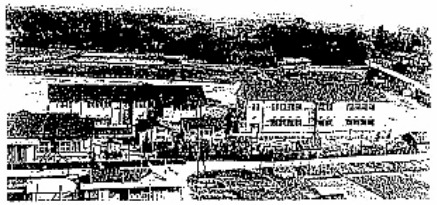
越谷市郷土研究会　理事　高崎　力



『鳥文斎栄之の瓦曽根溜井図』

越谷市郷土研究会　理事　加藤幸一

（昭和２７年・桜井小学校）



（昭和３７年・東中学校）

消えた木造校舎

高崎　力

大正三年十二月、それまで仮教場であった大泊安国寺から引越しの際、新築された桜井村の小学校校舎は、大正十二年の関東大震災で南校舎は倒壊した。北校舎（写真右）は北側に傾斜したので引き起こし、米国援助の丸太で支えられながら、町村合併後まで使用された。

昭和三十二年、木造校舎としては市内最後の建築となった東中学校校舎（写真左）も今では他の小中学校同様に鉄筋コンクリート造りになり、市内から木造校舎は消えた。

写真の木造不動橋は、東中学校開校に合わせて架橋された。現在は三代目の鉄筋コンクリート橋になり、遠方の田園には流通団地の大きな建物が群立するようになった。

鳥文斎栄之（ちょうぶんさいえいし）『瓦曽根溜井図（かわらぞねためいず）』の説明

加藤幸一

一・鳥文斎細田栄之について

江戸時代の天明から寛政年間（一七八一～一八〇一）にかけてと思われる作品で、一部彩色を施した水墨画である。鳥文斎栄之が、瓦曽根村の世襲名主である中村家（現、瓦曽根一－五－一九）に遊びに来たときに瓦曽根溜井の景観にいたく感動して描いたものであろう。瓦曽根村の名主である中村家五代目彦左衛門重築は、六十二歳で隠居し、寺島村（現、墨田区東向島）に移り住み、「菊のや」と称した会席料理屋を経営したが、その頃に浮世絵師の鳥文斎栄之と知り合ったとも推定されている。隠居したのは寛政元年（一七八九）頃である。するとこの絵は寛政年間の作品となる。

栄之は喜多川歌麿・鳥居清長と並ぶ天明・寛政期の三大浮世絵師に数えられている。線の細かい気品のある優美な美人画を得意とし、風景画を描いたものとしては珍しいという。

昭和五〇年（一九七五）五月二日に越谷市によって有形文化財に指定される。のちこの絵は瓦曽根の中村家（故、裕彦氏）から寄贈されて、越谷市役所市長室に飾られ、現在は越谷市立図書館に保管されている。

絵そのものの大きさは、横一二七・四cm（上）・一二七・六cm（下）、縦四四・二cmである。

二・瓦曽根溜井図の情景について

向かって右

右端の上には、栄之の落款が見られ『榮之筆』との自筆の署名と印（朱印）が押されている。

落款の向かって左下には、白に着色された帆のみが描かれている二艘の

帆船（上部には帆柱の先端も見られる）が見られる。上流から運ばれて来た船荷を、松土手と呼ばれる中土手の南岸で移し変えて松土手の北岸に陸づけされた船に積まれ、下流の中川を通り江戸に送られたのである。

右端の中央には、元荒川（葛西用水）を渡す土橋が松土手に架かっているのがわかる。この橋の上に松土手に向かって渡っている人が描かれ、すぐ下流には一艘の小船が浮かぶ。

この橋は、昭和三〇年代まであった欄干のない土橋『平和橋』にあたる。明治二〇年の「瓦曽根村地誌調」によると、『溜井橋』として紹介され、長さ一二間（約二二メートル）、幅九尺（約三メートル）、構造は土造、新設は延享二年（一七四五）三月となっている。

昭和一四年頃に台風で流失し、昭和二八年頃旧『平和橋』が架かる。対岸の東小林村（現、東越谷）の人々にとってはとても便利になるため、その喜びを提灯行列などして祝ったという。なお、今の市役所そばに架かっている『新平和橋』は昭和四一年に起工したものである。

右端下には、民家の屋根らしきものが見られる。

中央

向かって右端から中央にかけて、松や船荷を積み降ろしする河岸場（かしば）関係の建物が見られる松土手（松の植えられた中土手）があり、その岸辺には芦が生えている。

中央には、満々と水をたたえているであろう溜井の水面の上を西に飛ぶ白鷺（白に着色）が二羽見られる。また、四ケ村（しかむら）用水の取水口である四ケ村用水圦（いり）には白鷺（白に着色）が一羽止まっている。

向かって右手前には、瓦曽根村の稲荷社の鳥居（朱に着色）とその本殿の屋根（妻入りの部分が朱に着色）が見られる。最手前の大きな松（緑に着色）は中村家のものであろう。

この松の向かって右横には、中村家の屋根と思われるものが大きく描かれている。

栄之は、鳥居と屋根の向きからすると、この松の手前上空あたりから見る瓦曽根溜井の風景を描いているのであろう。

中村家の屋根の先端の下の左側に、右方の溜井橋より続く地面の線が描かれ、その線は中村家の松の木の中程を通り、四ケ村用水の取水口を経て、画面左端まで続いている。

向かって左の中程には、水神（すいじん）社の森や鳥居の一部が描かれている小島が見られ、その右隣に仮メ切りの関枠が見られる。水神社は、明治期の越谷町の漢詩人山本梅墻（ばいとう）が設定した『越谷八景』の内の「水神の落雁」の水神社を指す。水神様のそばにあった『妙法水神』と刻まれた石碑が現在島根婦久（東越谷二－二〇－三）宅に祭られている。

水神社の対岸には、河畔砂丘で一段と小高くなった所にある東福寺（とうふくじ）の松林（緑に着色）が見られる。『越谷八景』の内の松林にかかる「東福寺の秋月」と言われた東福寺を指す。

また、松土手から対岸に続く土手道が対岸の小林村の土手道とぶつかったあたり、つまり水神社の対岸の右の方に一軒家が見られる。これは民家である会田家宅（東越谷二－二－三）であろう。

向かって左手前には、鞍を付けた荷馬（一部分に白に着色されている跡があるので白馬と思われる）とそれを引く頭に手ぬぐいをかけた男が東に向かっている様子が描かれている。

東福寺の松林の向かって右から水平にぼけて描かれているものは、東福寺の一段と高い砂丘より東に続く河畔砂丘上に成立した道の両側に見られる集落の様子で、小林村の民家の屋敷森群であろう。この古道は、現在の東越谷二丁目と三丁目との境の道から東越谷七丁目の中央を横切る道で、現在も古くからの農家の家がこの道なりに点在している。

向かって左

向かって左には、溜井に浮かぶ小舟が見られる。この小舟には人影が二つ見られ、向かって右の人は四ツ三網で魚をとっている様子がわかる。溜

井で漁業を営んでいる漁師であろう。

また、それより右斜め上には、水神様の小島と対岸との間から棹をとって小船を西に漕いでいるのが見られる。

左端には、芦の繁る溜井の岸辺が描かれている。その最手前には、屋根が二つ見られる。これは現在も越ケ谷一丁目七番地にある八幡社関係の建物であろう。この八幡社は越ケ谷町のはずれにあり、日光街道から土手道に向かう古道（越ケ谷と瓦曽根との境をなしている）に面した所である。現在の八幡社のそば、土手道に近いところには、地元の人が『お不動様』と呼んでいるお堂が正面を日光街道から続く古道に向けてぽつんと残っている。正面には「成田山」と書かれた額が掲げられ、お堂の土手道側の側面の屋根に近いところには不動の絵馬や拝み絵馬が残されており、かつては不動信仰が盛んであった名残がわかる。江戸期にはこの辺に八幡社敷地内に置かれた神宮寺があったのであろう。このお堂はその名残と思われる。

左端上より（この辺りに民家の屋根が一つ描かれている）水平に中央方向にぼやけて描かれているものは柳原の岸辺であろう。『越谷八景』の内の柳の繁った河原に降る「柳原の夜雨（よさめ）」と言われた柳原を指す。

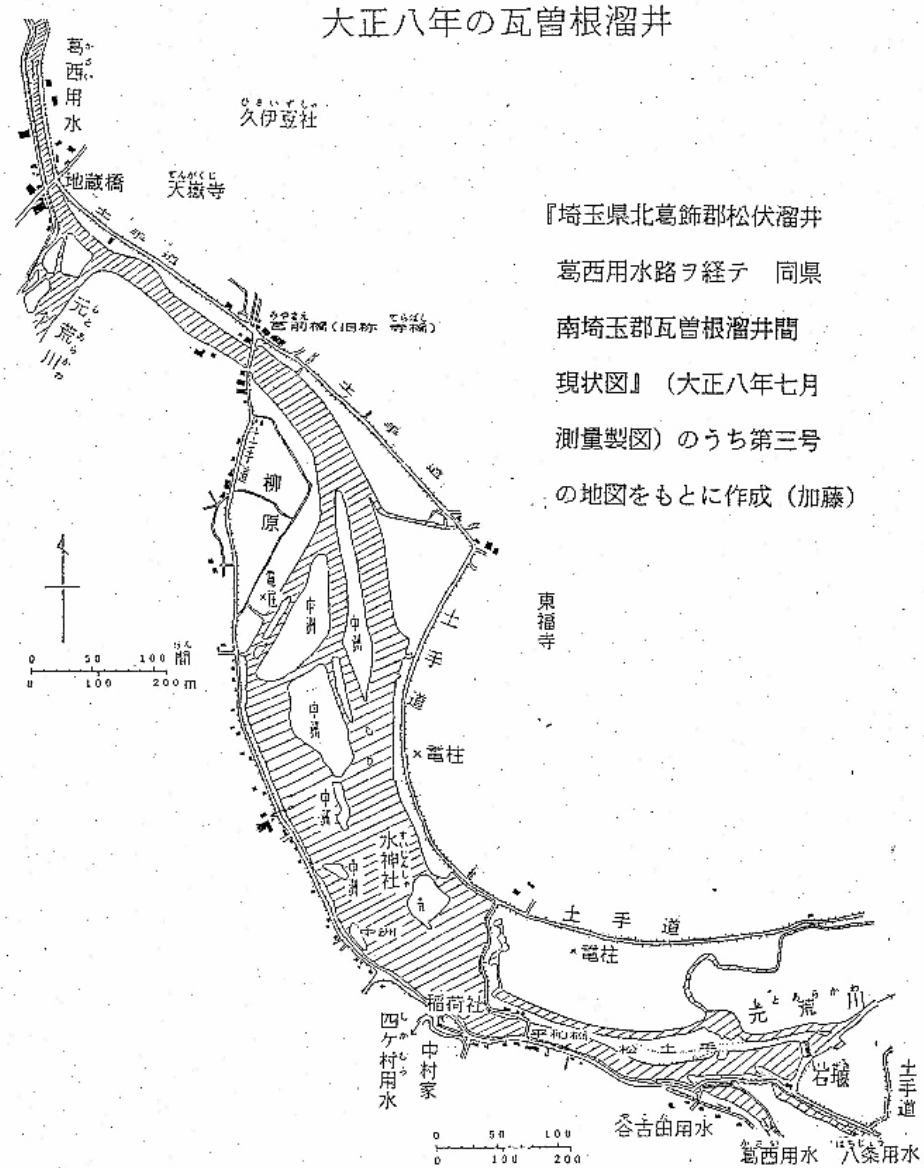
柳原の上空には、やや北よりの北北西に今も見られる日光の山（男体山）がぼやけて描かれている。

遠景には日光の山の他、筑波の山々がくっきりと見られたはずであるが、この絵では確認できない。筑波の山は越谷ではやや北よりの北東方向に見られ、この図では会田家東側上空に位置すると思われる。

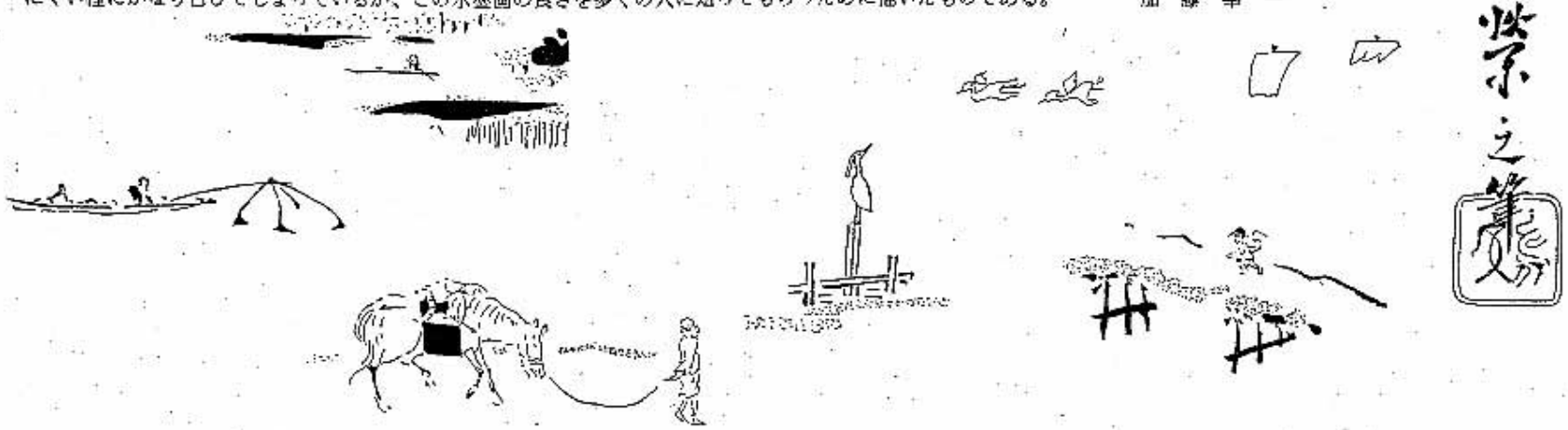
なお中村家から見ると、北の方角は水神社と東福寺との間であり、図のように東から会田家、東福寺、水神社と並ぶ位置関係は矛盾しない。

この栄之が描いた瓦曽根溜井図は構図もよく芸術的にもすぐれ、当時の様子を正確に伝える貴重な資料といえる。

大正八年の瓦曽根溜井



『埼玉県北葛飾郡松伏溜井葛西用水路ヲ経テ　同県南埼玉郡瓦曽根溜井間現状図』（大正八年七月測量製図）のうち第三号の地図をもとに作成（加藤）

鳥文斎榮之の『瓦曽根溜井図』

上の絵は越谷市が文化財に指定した水墨画『瓦曽根溜井図』を芦の一本一本までも正確に模写したものである。縮尺は~~1/5~~である。実物はその絵の良さがわかりにくい程にかなり古びてしまっているが、この水墨画の良さを多くの人に知ってもらうために描いたものである。　　加藤幸一